

公益財団法人図書館振興財団

第17回 子どもの本 この1年を振り返って 2016年 ブックリスト

■フィクションの部■

児童図書館研究会 野崎 真由美

2016年のフィクションの傾向としては、海外の作品よりも日本の作品の方が目につきましたが、新人の作品も多く、テーマもプロットも良く文章も読み易いのに、作品として未熟で、もう少し書きこんでほしかったと思わせる作品もありました。

家族のあり方が複雑になる中、昔話の中の援助者のような役割で、おばあさんや犬が主人公と関わる作品が多くありました。

学校図書館法が改正され、司書が入り始めるなど学校図書館が注目されている影響か、学校を意識して教科書に掲載されている作品のシリーズや、取り上げられている作家の作品の全集の再版や新装版での出版なども多かったと感じます。

また全体に、対象の読者が見えてこない作品が多かった印象があります。中には、子どもたちよりもむしろ、子どもを取り巻く大人たちに読んでほしいと思った作品もありました。

家族の関係を描いた作品

20年前には描かれなかった、今の日本が抱える問題を正面からテーマにしている作品

日常や友だち関係

生きることに困難を感じている子どもたちの物語

日本の文化や歴史

幼年

こぐま社「こぐまのどんどんぶんこ」

ファンタジー

民族・移民・難民

海外の作品

戦争・平和

文学のピースウォークシリーズ(新日本出版社)

詩・昔話

復刊・再刊・新訳など

シリーズ続刊

『西遊記』(理論社)は4年ぶり

新シリーズ

その他

実在の人物や出来事に触発されて書かれた作品

■家族

	中	『ぼくのなかのほんとう』/パトリシア・マクラクラン作, 若林 千鶴訳/リーブル/2016. 2/¥1300/(933. 7)
★	高	『ケンガイにっ!』(文学の森)/高森 美由紀・作/フレーベル館/2016. 3/¥1400/(913. 6)
	高	『てんからどどん』(ノベルズ・エクスプレス)/魚住 直子・作/ポプラ社/2016. 5/¥1300/(913. 6)
★	高	『夜間中学へようこそ』(物語の王国)/山本 悦子・作/岩崎書店/2016. 5/¥1500/(913. 6)
★	高	『ぼくたちのリアル』/戸森 しるこ・著/講談社/2016. 6/¥1300/(913. 6)
	高	『レイさんといた夏』(講談社・文学の扉)/安田 夏菜・著/講談社/2016. 7/¥1400/(913. 6)
★	高	『坂の上の図書館』/池田 ゆみる・作/さ・え・ら書房/2016. 7/¥1300/(913. 6)
	高	『あたしの、ボケのお姫様。』(teens' best selections)/令文 ヒロ子・著/ポプラ社/2016. 10/¥1400/(913. 6)
	高	『十一月のマーブル』/戸森 しるこ・著/講談社/2016. 11/¥1300/(913. 6)
	高	『紅のトキの空』(評論社の児童図書館・文学の部屋)/ジル・ルイス・作, さくま ゆみこ・訳/評論社/2016. 12/¥1600/(933. 7)

■日常・友だち

	中	『脱走ペンギンを追いかけて』(いのちいきいきシリーズ)/山本 省三・作/佼成出版社/2016. 3/¥1300/(913. 6)
	低・中	『ハルとカナ』/ひこ・田中・作/講談社/2016. 8/¥1300/(913. 6)
	中	『ねこまつりのしょうたいじょう』/いとう みく・作/金の星社/2016. 9/¥1300/(913. 6)
★	中・高	『11歳のバースデー 1~4』(くもんの児童文学)/井上 林子・作/くもん出版/2016. 10~/1~4全て¥1100/(913. 6)
	高	『二ノ丸くんが調査中』(偕成社ノベルフリーク)/石川 宏千花・作/偕成社/2016. 10/¥900/(913. 6)
	高	『チキン!』(文研じゅべにーる)/いとう みく・作/文研出版/2016. 11/¥1300/(913. 6)
	中	『ふたりのカミサウルス』(スプラッシュ・ストーリーズ)/平田 昌広・作/あかね書房/2016. 11/¥1100/(913. 6)

■生きることに困難を感じているこどもたち

★	高	『テオの「ありがとう」ノート』/クロディーヌ・ル・グイック=プリエト・著, 坂田 雪子・訳/PHP研究所/2016. 3/¥1400/(953. 7)
---	---	---

	高	『ガラスの壁のむこうがわ』/せいの あつこ・著/国土社/2016. 3/¥1400/(913. 6)
	高	『「水辺の楽校」の所くん』/本田 有明・著/PHP研究所/2016. 6/¥1300/(913. 6)
	中	『笑われたくない!』(文研ブックランド)/手嶋 ひろ美・作/文研出版/2016. 9/¥1200/(913. 6)
★	高	『レイン 雨を抱きしめて』(Sunnyside Books)/アン・M.マーティン・作, 西本 かおる・訳/小峰書店/2016. 10/¥1500/(933. 7)
	高	『ジョージと秘密のメリッサ』/アレックス・ジーノ・作, 島村 浩子・訳/偕成社/2016. 12/¥1400/(933. 7)

■日本の文化や歴史

	高	『春風亭一之輔のおもしろ落語入門』/春風亭 一之輔・落語/小学館/2016. 4/¥1500/(913. 7)
	高	『旅のお供はしゃれこうべ』/泉田 もと・作/岩崎書店/2016. 4/¥1300/(913. 6)
	高	『若冲 ぞうと出会った少年』/黒田 志保子・著/国土社/2016. 5/¥1300/(913. 6)
	高	『さっ太の黒い子馬』(講談社・文学の扉)/小俣 麦穂・著/講談社/2016. 6/¥1400/(913. 6)
★	高	『駅鈴(はゆまのすず)』/久保田 香里・作/くもん出版/2016. 7/¥1600/(913. 6)
★	高	『落語少年サダキチ』/田中 啓文・作/福音館書店/2016. 9/¥1400/(913. 6)

■幼年

	低・中	『しゅくだい大なわとび』(とっておきのどうわ)/福田 岩緒・作・絵/PHP研究所/2016. 1/¥1100/(913. 6)
	低	『へっちゃらトーマス』(こころのほんばこシリーズ)/パット・ハッチンスぶん・え, 小宮 由・やく/大日本図書/2016. 1/¥1400/(933. 7)
	低	『てんきのいい日はつくしとり』(福音館創作童話シリーズ)/石川 えりこ・さく・え/福音館書店/2016. 2/¥1400/(913. 6)
	低	『ポンちゃんはお金もち』(こぐまのどんどんぶんこ)/たかどの ほうこ・さく・え/こぐま社/2016. 3/¥1200/(913. 6)
	低	『きょうはかぜでおやすみ』(こころのほんばこシリーズ)/パトリシア・マクラクラン・ぶん, 小宮 由・やく/大日本図書/2016. 2/¥1400/(933. 7)
	低	『やさしいティラノサウルス』/くすのき しげのり・作/あかね書房/2016. 2/¥1000/(913. 6)
	低	『ようこそなぞなぞしょうがっこうへ』(わくわくえどうわ)/北 ふうこ・作/文研出版/2016. 2/¥1200/(913. 6)
	低	『はいくしょうてんがい』/苺田 澄子・作/偕成社/2016. 3/¥1300/(913. 6)

	低	『日がさ雨がさくもりがさ』(おはなしのまど)/佐藤 まどか・作/フレーベル館/2016. 5/¥1000/(913. 6)
	低	『ツトムとでんしゃのカミサマ』(おはなしだいすき)/にしかわ おさむ・ぶん・え/小峰書店/2016. 5/¥1200/(913. 6)
★	低	『ドアのノブさん』(わくわくライブラリー)/大久保 雨咲・作/講談社/2016. 8/¥1400/(913. 6)
	低	『まいごのアローおうちにかえる』(おはなしみーつけた! シリーズ)/竹下 文子・作/佼成出版社/2016. 8/¥1200/(913. 6)
	低	『にわとり城』(こぐまのどんどんぶんこ)/松野 正子・作/こぐま社/2016. 10/¥1200/(913. 6)

■ファンタジー

	高	『魔法が消えていく…』/サラ・プリニース・作, 橋本 恵・訳/徳間書店/2016. 1/¥1600/(933. 7)
★	高	『賢女ひきいる魔法の旅は』/ダイアナ・ウィン・ジョーンズ・作, アーシュラ・ジョーンズ・作, 田中 薫子・訳/徳間書店/2016. 3/¥1700/(933. 7)
	高	『アンティーク・シオンの小さなせき』(ティーンズ文学館)/茂市 久美子・作/学研プラス/2016. 6/¥1400/(913. 6)
	中	『きかせたがりやの魔女』/岡田 淳・作/楷成社/2016. 6/¥1200/(913. 6)
★	高	『フォックスクラフト 1 アイラと憑かれし者たち』/インバリ・イセーレス・著, 金原 瑞人・訳, 井上 里・訳/静山社/2016. 7/¥1600/(933. 7)
	中	『透明犬メイ』(おはなしガーデン)/辻 貴司・作/岩崎書店/2016. 8/¥1200/(913. 6)

■民族・移民・難民

	高	『ラミッツの旅 ロマの難民少年のものがたり』/グニツラ・ルンドグレーン・作, きただい えりこ・訳/さ・え・ら書房/2016. 1/¥1400/(949. 83)
★	中	『空にむかってともだち宣言』/茂木 ちあき・作/国土社/2016. 3/¥1300/(913. 6)
	中	『クマと家出した少年』/ニコラ・デイビス文, もりうち すみこ・訳/さ・え・ら書房/2016. 3/¥1300/(933. 7)

■海外の作品

	高	『くろグミ団は名探偵 カラス岩の宝物』/ユリアン・プレス作・絵, 大社 玲子・訳/岩波書店/2016. 4/¥1300/(943. 7)
	高	『くろグミ団は名探偵 石弓の呪い』/ユリアン・プレス作・絵, 大社 玲子・訳/岩波書店/2016. 8/¥1300/(943. 7)
	中	『カルペパー一家のおはなし』/マリオン・アピントン作, 清水 眞砂子訳/瑞雲舎/2016. 6/¥1500/(933. 7)

★	中	『ペットのきんぎょがおならをしたら…?』/マイケル・ローゼン作, ないとう ふみこ訳/徳間書店/2016. 6/¥1200/(933. 7)
	高	『最後のゲーム』/ホリー・ブラック・作, 千葉 茂樹・訳/ほるぷ出版/2016. 6/¥1500/(933. 7)
	高	『サバイバー 1・2』ジェフ・プロブスト・著, クリス・テベッツ・著, 澤田 澄江・訳/講談社/2016. 7~/1・2共に¥1350/(933. 7)
	中	『まいごのまいごのアルフィーくん』/ジル・マーフィ・著, 松川 真弓・訳/評論社/2016. 7/¥1200/(933. 7)

■戦争・平和

	高	『霧のなかの白い犬』/アン・ブース・著, 杉田 七重・訳/あかね書房/2016. 3/¥1400/(93. 7)
	高	『大久野島からのバトン』(文学のピースウォーク)/今関 信子・作/新日本出版社/2016. 6/¥1800/(913. 6)
	高	『金色の流れの中で』(文学のピースウォーク)/中村 真里子・作/新日本出版社/2016. 6/¥1800/(913. 6)

■詩・昔話

	高	『まど・みちお みんなが歌った童謡の作者』(伝記を読もう)/谷 悦子・文/あかね書房/2016. 3/¥1500/(911. 52)
	中	『そして 谷川俊太郎自選詩集』(ジュニア・ポエム双書)/谷川 俊太郎・詩/銀の鈴社/2016. 4/¥1600/(911. 56)
	高	『日本の詩 1~10 新版』/遠藤 豊吉・編・著/小峰書店/1~10全て2016. 11/1~10全て¥1300/(911. 568)
	中~	『遠野物語』/柳田 國男・原作, 柏葉 幸子・編著, 田中 六大・絵/偕成社/2016. 2/¥1200/(382. 122)
	低	『まるごとごくり! ロシアの昔話』(こころのほんばこシリーズ)/シンシア・ジェイムソン・再話, 小宮 由・やく/大日本図書/2016. 3/¥1400/(983)
	高	『お話は土の城のテラスで 西アフリカ・トーゴの昔話集』/和田 正平・[編]著/メディアアイランド/2016. 11/¥2000/(994. 73)

■復刊・再刊・新訳など

★	高	『シロクマ号となぞの鳥 上・下』(岩波少年文庫)/アーサー・ランサム・作, 神宮 輝夫・訳/岩波書店/上・下共に2016. 1/上・下共に¥760/(933. 7)
	高	『いたずらロバート 普及版』/ダイアナ・W.ジョーンズ・作, エンマ・C.クラーク・絵, 榎 朝子・訳/復刊ドットコム/2016. 2/¥1800/(933. 7)
	高	『イワンとふしぎなこうま』(岩波少年文庫)/ピョートル・エルショーフ作, 浦 雅春・訳/岩波書店/2016. 2/¥680/(981)
★	中	『ミス・ピアンカ くらやみ城の冒険』(岩波少年文庫)/マージェリー・シャープ作, 渡辺 茂男・訳/岩波書店/2016. 5(「くらやみ城の冒険」(1987年刊)の改題)/¥700/(933. 7)

★	中	『ミス・ビアンカ ダイヤの館の冒険』(岩波少年文庫)/マージェリー・シャープ作, 渡辺 茂男・訳/岩波書店/2016. 7(「ダイヤの館の冒険」(1987年刊)の改題)/¥660/(933. 7)
★	中	『ミス・ビアンカ ひみつの塔の冒険』(岩波少年文庫)/マージェリー・シャープ作, 渡辺 茂男・訳/岩波書店/2016. 8(「ひみつの塔の冒険」(1987年刊)の改題)/¥660/(933. 7)
	高	『ココの詩』/高楼 方子・作/福音館書店/2016. 10(リブリオ出版 1987年刊の再刊)/¥2200/(913. 6)
	高	『十一月の扉』/高楼 方子・著/福音館書店/2016. 10(新潮文庫 2006年刊の再刊)/¥1800/(913. 6)
	高	『時計坂の家』/高楼 方子・著/福音館書店/2016. 10(リブリオ出版 1992年刊の再刊)/¥1900/(913. 6)

■シリーズ続刊

	高	『西遊記 11 火の巻』(斉藤洋の西遊記シリーズ)/[呉 承恩・作]/理論社/2016. 1/¥1500/(923. 5)
	中	『べんり屋、寺岡の春。』(文研じゅべにーる)/中山 聖子・作/文研出版/2016. 1/¥1300/(913. 6)
	中	『遊園地の妖怪一家』(妖怪一家九十九さん)/富安 陽子・作/理論社/2016. 2/¥1300/(913. 6)
	中	『菜の子ちゃんとカッパ石』(福音館創作童話シリーズ)/富安 陽子・作/福音館書店/2016. 4/¥1300/(913. 6)
	中	『おめでたこぶた その3 サムのおしごと』(世界傑作童話シリーズ)/アリソン・アトリー・作/福音館書店/2016. 6/¥1300/(933. 7)
	中	『あらしをよぶ名探偵』([ミルキー杉山のあなたも名探偵シリーズ])/杉山 亮・作/偕成社/2016. 6/¥1000/(913. 6)
★	高	『君の話をきかせてアメール』(文研じゅべにーる)/ニキ・コーンウェル・作, 渋谷 弘子・訳/文研出版/2016. 7/¥1400/(933. 7)
	高	『ロアルド・ダールコレクション 別巻3 ダールのおいしい!? レストラン』/ロアルド・ダール・[著]/評論社/2016. 9/¥1100/(938. 78)
	低	『ピクルスとふたごのいもうと』(福音館創作童話シリーズ)/小風 さち・文/福音館書店/2016. 9/¥1600/(913. 6)
	高・YA	『ナンタケットの夜鳥』(「ダイドーの冒険」シリーズ)/ジョン・エイキン・作, こだま ともこ・訳/富山房/2016. 10/¥1800/(933. 7)
	高	『指きりは魔法のはじまり』(シノダ!)/富安 陽子・著/偕成社/2016. 11/¥1300/(913. 6)

■新シリーズ

	中	『オバケ屋敷にお引っ越し スギナ屋敷のオバケさん』/富安 陽子・作/ひさかたチャイルド/2016. 3/¥1300/(913. 6)
	中	『魔女になりたい!』(見習い魔女ベラ・ドンナ)/ルース・サイムズ・作, 神戸 万知・訳/ポプラ社/2016. 10/¥1200/(933. 7)
	高	『スター・オブ・デルトラ 1 <影の大王>が待つ海へ』/エミリー・ロッタ・著, 岡田 好恵・訳/KADOKAWA/2016. 11/¥900/(933. 7)

	中・低	『バクのバンバン、町にきた ふたりはなかよしマンゴーとバンバン』/ポリー・フェイバー・作, 松波佐知子・訳/徳間書店/2016. 11/¥1400/(933. 7)
--	-----	--

■その他

	高	『リトル・ダンサー』/田村 理江・作/国土社/2016. 3/¥1400/(913. 6)
★	中	『こぶたものがたり チェルノブイリから福島へ』/中澤 晶子・作/岩崎書店/2016. 3/¥1300/(913. 6)
★	高	『ハートソング 作曲家アントニオ・ヴィヴァルディとある少女の物語』/ケビン・クロスリー＝ホランド・文, 小島 希里・訳/BL出版/2016. 4/¥1600/(933. 7)
	中	『蒼とイルカと彫刻家』(いのちいきシリーズ)/長崎 夏海・作/佼成出版社/2016. 5/¥1300/(913. 6)
★	高	『ぐるぐるの図書室』(講談社・文学の扉)/工藤 純子・ほか著/講談社/2016. 10/¥1400/(913. 68)
★	高	『三島由宇、当選確実!』(講談社・文学の扉)/まはら 三桃・著/講談社/2016. 11/¥1400/(913. 6)

公益財団法人図書館振興財団
第17回 子どもの本 この1年を振り返って 2016年 講演録
■フィクションの部■

講演：児童図書館研究会 野崎 眞由美

みなさんこんにちは。児童図書館研究会の野崎です。そのほか、図書館振興財団の児童書選書委員会にも参加しています。

今回の図書リストは、毎月行われている選書委員会で話題になった本を中心に、何名かの方と一緒に見直しをし、改めて意見を頂いて作りました。最終的には、20数年勤めていた公共図書館非常勤としての自身の経験と、退職してから半年間務めた学校図書館の子どもたちの様子や感想を元に判断して選んでいます。

これから紹介していく作品は、選書委員会の中でも評価が分かれたり、「この辺りが物足りない」など様々な意見が出て私自身も迷うところもあるため、皆さん自身がお読みになって、図書館や学校など、対象となる子どもたちに適当であるかを考えて選んでいただきたいと思っています。

■2016年のフィクションの傾向

2016年の傾向として、海外の作品よりも日本の作品が目につきました。新人賞受賞の作品など、初めて出版される作家の作品も多かったのですが、テーマも話の筋も良く文章も読み易いのに、何か物足りなさを感じたり、「こんな風に終わるの？」と疑問の残る作品もありました。

家族のあり方が複雑になる中、数年前から田舎に行くなど現状を離れる事で救われる、また動物によって癒されるという作品が多く出版されていますが、2016年は「祖母」と「犬」が多く登場しました。

また、学校図書館法の改正により、学校司書が配置されるなど学校図書館に注目が集まっていますが、それを意識してか教科書掲載の作品や作家の全集などの再版、新装版の出版が多くありました。

全体としては、対象が誰であるのか焦点が定まらない作品も多く、子どもたちよりも、むしろ子どもを取り巻く大人が読んだ方が良いと思える作品もありました。

これからご紹介する作品の中には、いくつものテーマを含んでいるものもあります。そのあたりは汲み取っていただければと思います。

■家族の関係を描いた作品

今の日本が抱える問題を映しだし、ネグレクトや義理の親、同居人による暴力など、20年前には描かれなかった家族の状況が描かれています。また父子家庭の作品も多くなったと感じます。

最初に紹介するのは『ケンガイにっ!』。

交通事故で弟が亡くなってから、家庭崩壊。オンラインゲームにはまる俊を心配した両親が、夏

休み祖母のいる田舎へ預けることにします。何とそこはスマホの圏外！このタイトルの『ケンガイにっ！』はスマホの圏外という意味です。一度は逃げ出そうとしますが…。

祖母の仕事である亡くなる人へ最後の食事を届ける「お食いじめ」の風習、戦争で兄弟を亡くしている漆塗りの師匠の話やお盆の不思議な体験などを通して、俊の心も次第にほぐれていき、今まで我慢していた想いを祖母にさらけ出します。人との関わりの大切さも感じる作品です。

続いて、『夜間中学へようこそ』。

主人公の少女優菜の中学入学と同時に、夜間中学に通うと言い出した祖母。戦後の混乱で学校に通えず、漢字が読めない事を今まで家族に隠していたことが分かってきます。祖母が足をくじいた事で優菜は学校に付き添うことになり、一緒に教室で過ごすうちに様々な人と出会い、色々な事を学んでいきます。家族のそれぞれの立場での考え方もよく描かれていて良かったです。

夜間中学があることは知っていましたが、実際どのような所でどのような人たちが通っているのか等を知ることができた作品でした。

主人公は中学生ですが、高学年の子どもたちであれば十分に読める作品であると思います。

『ぼくたちのリアル』は、講談社児童文学新人賞の作品です。

幼馴染で学年一の人気者 璃在(リアル)と5年生で同じクラスになったアスカ。リアルは1年生の時に弟を海の事故で亡くしますが、その事で母に責められ、その後入院した彼女とはすれ違いのまま過ごしています。普段は明るいリアルですが、夏が近づくとそのことを思い出して元気がなくなります。ボーイズラブ的な話もあり、「こんな風に終わるの？」という疑問も残った作品でした。

周囲からは、少々作り話っぽいといった意見もあったものの、重いテーマを感じさせずに読ませる文章力と構成のうまさには注目したい作家です。11月出版の第2作『十一月のマーブル』(講談社)も衝撃的な内容です。

『坂の上の図書館』。母親と共にシングルマザーの自立支援施設に来た少女の物語です。

ろくに学校にすら行かせてもらえず、5年生で掛け算の九九もできない引っ込み思案の少女が、前向きで元気なクラスメートや図書館の司書と出会って成長していく物語です。

作者自身が元図書館司書であったそうで、物語の中で少女が読み聞かせを通して初めて借りる絵本が『ちいさいおうち』。そして司書に薦められて初めて読む本が、『エルマーのぼうけん』でした。

司書とのやり取りや出会う作品、図書館でのエピソードなど、日常の小さな図書館のことが自然に描かれていて、司書としてこのような作品があるということを知っていただきたく、紹介しました。

■日常や友だち関係

子どもたちの日常が描かれた作品は毎年たくさん出版されますが、その中から『11歳のパースデー』。5年生のクラス替えで、初めて同じ班になった5人の個性的な子どもたちの誕生日のエピソードが1冊ずつ収められた全5巻のシリーズ本です。

人物紹介を見ると分かるように子どもたちの名前が「春山ましろ」「夏木アンナ」「伊地知一秋」

「冬馬晶」「四季和也」とあり1年間の話になります。

今風の表紙でこの薄さのソフトカバーなので、最初は軽いノリの本だと思って読みましたが、想像以上に子どもたちの心の変化が描かれている本でした。登場人物は5年生ですが、4年生から読めると思います。

■生きることに困難を感じている子どもたちの物語

近年、身体に障害を持った子どもや自閉症の子どもたちが生き生きと描かれた作品が増えている印象がありますが、2016年も秀作が多かったと感じます。

また、クラスになじめず自分をうまく表現できない子どもや、行動が少しゆっくりな子どもたちを描いた作品も多くありました。紹介するのは、『テオの「ありがとう」ノート』。

左手と両足が不自由で車いす生活の少年テオは、家族と離れて施設で暮らしています。ある日、何をするにも「すみません」「ありがとう」を言わなければならないのが嫌になり、そのことでカウンセリングを受けることになってしまいます。そんなときに出会った卓球の先生は、時間がかかっても何でも自分でさせます。やがて小さい子の面倒を見て言われた「ありがとう」をためて、自分が言った数を精算しようと思いつき、ノートに書いていきます。

「自分は生まれてこない方が良かったのでは？」と悩むテオ。両親も施設に預けている事に罪悪感を持ち、互いに微妙な距離感があります。そんな関係も次第に変わっていきます。

私たちが日々当たり前前にしている事を、人に頼まなければならない生活があるということを考えさせられる作品でもありました。

もう1冊は『レイン 雨を抱きしめて』。

高機能自閉症の少女ローズは父と二人暮らし。同音異義語と素数にこだわっています。同音異義語を見つけた時や、ルールを守らない人がいると大声を出し、いつもと違っていたり騒がしかったりするとパニックになります。そんな娘に戸惑う父ですが、自身が父親の虐待で弟と共に里親の元を転々として育ったので、誰の力も(たとえ弟の力でも)借りずに育てたいと思っています。

ある日、父が迷い犬を連れて帰り、ローズはその犬を「レイン」と名づけます。ローズとレインに平穏な毎日が続きますが、ハリケーンの日レインが行方不明になってしまいます。彼女の丹念な捜索でレインは保護施設で見つかりますが、埋められていたマイクロチップで本当の飼い主がいると知らされます。

2015年12月出版の『ハルと歩いた』(徳間書店)でも描かれていましたが、マイクロチップを飼い犬に埋め込んでおくと、迷子になった時など首輪がなくとも、獣医さん等で調べると飼い主が分かるようになっているそうです。

一生懸命周囲を観察し、健気に生きるローズと、娘の愛し方のわからない父。ローズを丸ごと受け入れて見守るおじさん。最後が切ないけれど、物語全体に悪人がいない、人の心の温かさが伝わってくる作品です。父親に対する評価は賛否ありましたが、私はこの父親のことを不器用だと思いました。

■日本の文化や歴史を扱った作品

2015年同様、日本の歴史や文化を伝える作品が多く出版され、意欲作が多いと感じました。

中でも『[駅鈴（はゆまのすず）](#)』。

奈良時代中期の近江の国を舞台に、天皇の命を各地に伝える伝達手段「駅伝制」を描いた物語です。主人公は小里という少女。駅使（はゆまづかい）と言われる役人が、馬の中継点として利用した駅家（うまや）の娘で、彼女は、次の駅家まで駅使を案内する駅子（うまやのこ）になりたいと思っています。

女に生まれたけれど馬が好きで、駅家の仕事をしたいと積極的に行動する小里がとても魅力的です。まじめで大人しい駅使若見との恋も描かれ、とても微笑ましいです。

当時、主要道路には16キロの間隔で駅家が置かれていたそうですが、馬を乗り継いで重要な伝達をしている駅使という役人がいて、鈴が通行手形のように重要であった事が良く分かりました。今まであまり語られなかった事でもあったのでとても興味深いです。

見た目は厚い本ですが、展開がスピーディーで読み易く、あまり歴史が得意でなくても、天皇が京の都にいたことや、東大寺の大仏の事は知っているという子も多いので、内容も良く分かり、面白く読めると思います。中高校生向きかとも思いますが、時代小説や歴史が好きな高学年の子どもたちには読んでほしい作品です。

『[落語少年サダキチ](#)』。

ここ数年落語がブームで、落語関連の作品も多く出版されていますが、これは時空を超えて落語の世界そのもの、江戸時代を体験します。この物語の主人公 サダキチには本名がありますが、「サダキチ」という人物が登場する落語を語って以来、この名前と呼ばれるようになります。

刊末には落語家の方による「そもそも落語とは」が収録されていて、それがとてもわかり易く、紹介させていただきました。

■幼年

絵本から読みものへの橋渡しとしての幼年文学、こぐま社が「こぐまのどんどんぶんこ」シリーズを出版するなどの取り組みはありましたが、2015年ほど印象に残る作品はありませんでした。

『[ドアのノブさん](#)』。5つの話が入った短編集です。

引越しをする家族と一緒に連れていってもらえるものとばかり思っていたら、置いていかれてショックを受けるドアのノブ。新しく越してきた家族の荷物を引っかけるなど意地悪をしますが、だんだん馴染んでいくというお話です。

5つの話の中には「大人向けでは？」というシュールな作品もあり、低学年の子でも共感できる、3つくらいの話に絞った方が良かったのでは？との意見も出ました。また、幼年向けの短編集は、表紙のタイトルとなっている物語を一番最初に収録してほしいという意見もありました。

個人的には「すきまの闇」が好きです。ボタンが落ちて本棚の下に転がると、そこにいたクリップや安全ピンが「金じゃないのか」とがっかりします。人間はお金だとすぐに探すけれど、ここから出るためには、大掃除まで待つしかないと言います。飲み会でそんな話をしたら、皆「なるほど！」と納得していました。このユーモアを低学年の子どもたちはどう捉えるのでしょうか？

■ファンタジー

最近ファンタジーブームも去り、かなり落ち着いてきています。その中から2冊紹介します。

『賢女ひきいる魔法の旅は』。

2011年に亡くなったダイアナ・ウィン・ジョーンズの絶筆未完の物語を、俳優であり作家でもある妹のアーシュラが書き継いだ作品です。どこまでがダイアナが書いたのか誰にも分からない。訳者も検討がついているだけだと言います。親戚が集まって、続きを考えるなど会議をしたそうですがまとまらず、最終的には作家であるアーシュラに託されたそうです(「読者のみなさんへ」より)。

4つの島からなる連合国の北のスカア島で、賢女である叔母と暮っていたエイリーンは、賢女になる儀式に失敗して落ち込んでいました。ある日2人は大王の命により、魔法の障壁に囲まれたログラ島に捕われている皇子を救い出すための旅に出ます。それには3つの島の男を1人ずつ連れて行かなければなりません。

冒険ファンタジーのような筋立てですが、誰かを倒す訳でもなく、英雄もおらず、皆どこか頼りない。そんな中エイリーンは、自身でも気づかないうちに力を発揮していきます。子どもたちには、身近な感覚の物語です。最後にどんでん返しがあったり、謎が残されたりダイアナ作品ファンには物足りないかもしれませんが、個人的にはとてもわかり易く良かったです。

続いて『フォックスクラフト』。

人間の住む「うなりの地」の林で暮らすキツネの一家が、片目の雌狐が率いる群れに襲われます。遅れて帰った末娘のアイラは助かりますが、家族は誰もなくなっていました。家族を探すアイラは、オオカミに襲われ、魔法をあやつるシフリンと名乗るキツネに助けられます。アイラの兄ピリーを探すのが使命だと言うこのキツネを、果たして信じていいのか？アイラはキツネの命を守る第一の教え「みろ！まて！きけ！」を思い出し、彼を観察しつつ一緒に兄を探すうちに、人間につかまってしまう。

自分ではネズミも捕まえられる幼いアイラは、果たして兄を探し出せるのか。秘密の魔法「フォックスクラフト」をめぐる全3巻の冒険物語です。第2巻は昨年の秋刊行したばかりだそうです。翻訳されて日本で続きが読めるのは、今年の秋以降でしょうか。

■民族・移民・難民

少数民族や民族間の争い、移民や難民を題材にした作品が多く出版されました。紹介するのは日本の作品です。

『空にむかってともだち宣言』。

ミャンマーから家族で日本に逃げて来た少女が、転校生としてやってきます。その少女のいる4年生のクラスの子どもたちが、日本で暮らす難民について学んでいくという物語です。

現在どこの小学校にも、日本以外の国籍を持つ親がいたり、日本語がうまく話せない子がいるということが当たり前の時代です。こういったテーマが日本の児童文学で取り上げられたということに注目したいと思います。

■海外の作品

ここでは、はっきりとテーマに振り分けられない作品をまとめました。

『ペットのきんぎょがおならをしたら…?』

犬が欲しかったのに、金魚しか買って貰えなかったエルビーは、金魚に芸を教えることに。すると、おしりから泡を出して返事をしたり、計算の答えを出したり、そのうちにメロディーを奏でるまでになります。ついにはテレビ番組「びっくりコンテスト」に出場して優勝し、有名になります。「そんなのウソだー！」と思いつつも、実際に「びっくりコンテスト」を見ているように引き込まれます。イラストと文章が合っていて、とても楽しめる作品です。最後のオチまで笑えます。

読み易いので低学年でも楽しめますが、ばかばかしいとも思いつつ、少し大きい子どもたちでも文句なく楽しめる作品です。テーマや設定が複雑な作品が多い中、こういう本が少ないので、とても貴重です。上質のユーモアがある作品がもっと出版されてほしいと思います。

■戦争・平和

戦後70年の2015年には、戦争・平和について取り扱ったたくさんの作品が出版されましたが、2016年もその傾向が続いています。安易な出版や自分史のような作品が多い中、新日本出版社の「文学のピースウォーク」には注目したいです。

日本児童文学者協会の編集メンバーが、応募作品の構成や内容について検討し、中には作者に書き直しをしてもらうなどして出来上がった6冊の作品のシリーズです。近年の日本を憂いて、平和に込める想いが強く打ち出されています。日本の少年兵を描いた作品や舞台が近未来であるなど、今までの戦争文学とは違う視点で書かれています。

全体的にYA世代を意識して書かれていると思いますが、その中でも高学年の子どもたちなら読めると思える作品2冊を図書リストに掲載しました。

■詩・昔話

昔話の本は、2016年にはあまり多く出版されませんでした。

『日本の詩』全10巻は新版で出版されました。先に申し上げたように学校図書館を意識している印象がありますが、基本的な詩人は押さえているように思います。

■復刊・再刊・新訳など

2016年も再刊・復刊が多くありましたが、今を生きる子どもたちのための新訳も多く出版されています。訳者を変えて出版されたものも多いですが、やはり昔の作品は、言葉が難しかったり、今の時代に馴染まない言葉が使われていたりすることもあるので、新訳・改訳となることは良いと思います。

『シロクマ号となぞの鳥 上・下』

「ランサム・サーガ」シリーズはこの本で完結になります。神宮輝夫氏本人が、全12巻を足かけ7年もの歳月をかけて、自ら改訳・新訳したことに注目したいです(「訳をおえて」より)。根強いランサムファンには賛否あるようですが、今の子どもたちにはとても読みやすくなってい

ると感じます。

次に『ミス・ピアンカ』。

渡辺茂男氏が20年かけて訳した作品が少年文庫になりましたが、長男鉄太氏によるあとがきには「最初の3作品が少年文庫に仲間入り」とあるので、この3冊で終わる可能性もあるのではと危惧しています。各巻に、子どもの頃に作品を読んだ荻原規子さんなど、強い思い入れを持つ人たちの文章が掲載されています。

■シリーズ続刊

『西遊記』は4年ぶりに11巻が刊行されました。また、『べんり屋、寺岡』と『ロアルド・ダールコレクション』のシリーズは完結です。

『ダールコレクション』最後の巻は、ダールの作品に登場する「みみずスパゲティ」などの料理レシピが掲載されています。例えば「みみずスパゲティ」は、みみずに見えるような食材を使いつつ、全部美味しく食べられるレシピが紹介されています。

『君の話をきかせてアメル』。

2014年出版の『お話きかせてクリストフ』の続編です。装丁や文字の大きさは前作同様、中学年向きようですが、主人公（あるいはクリストフ）は成長して中学生になり、内容も民族間の対立の事が描かれているため、中学年には少し難しいと感じました。私自身は続編としてどうなのか？と思いましたが、こちらの作品の方が良かったという意見もあったため、取り上げました。どちらの本も分かりやすく書かれているので、「続編だから」という理由ではなく、それぞれ個々の作品として評価し判断いただければ良いのではないかと思います。

■新シリーズ

色々な本が刊行されていますが、どの作品も続きが楽しみです。『バクのバンバン』は1月にシリーズ2巻が出版されました。

■その他

ここには、少し気になったもの、例えば子どもに手渡す際「きちんと言葉を添えないといけない」と思う作品や判断に迷うもの、少し変わっているから紹介したいというものをまとめました。伝記ではありませんが、実在の人物をモデルにした作品や、実際にあった出来事に触発されて作られた作品などが、フィクションでも多く出版されました。

『こぶたものがたり』は2つの物語から構成される作品です。家畜として飼っている豚の中の1匹をペットのように可愛がっていたナターシャ。チェルノブイリの事故により、ブタを置いたまま避難しなくてはならなくなります。一方、福島でブタを飼っている少女も、原発事故のため避難を余儀なくされます。

2つの物語の間には、ナターシャの手紙が存在します。その手紙はナターシャが日本を訪れた際、知り合いになった日本の子どもに送ったものですが、それは、かつて子どもだった頃の、福島の少女の母に宛てたものでした。その手紙が2つの物語をつないでいます。作者はチェルノブ

イリ事故の数年後、避難している子どもたちが広島に招かれたという事実があることを知り、この物語を描いたそうです。

『こぶたものがたり』というタイトルと、表紙の可愛い絵からでは想像できないとても重い内容の物語です。本の見ただけでは、幼年文学と勘違いされてしまうのではと感じました。しかし、忘れてはいけない、伝えていかなければいけないことだけに、大人が介在して、幼い子どもたちには言葉を添え、大きい子どもたちには他の資料も添えて、きちんと手渡してほしい作品です。

『**ハートソング**』。画家であるジェーン・レイがヴェネツィアのヴィヴァルディ博物館で出会った少女たちの名簿に触発されて絵とプロットを考えたものうまくまとまらず、友人である作家に頼んで書いてもらったという作品です。

養護院で育つ少女たちの中で「音楽の娘たち」と呼ばれる合唱隊とオーケストラがいて、作曲家のヴィヴァルディが音楽教師として関わっていた実話で、カバー折り返しには「ヒストリカル・フィクション」とあります。本の中身を見ていただくと分かりますが、文章は横書きでページを開いた際、絵の方に先に目が行き、物語の流れが途切れる印象を受けました。

音楽家を取り上げている事、このような史実があった事を伝える作品として取り上げました。

少し変わった取り組みとして『**ぐるぐるの図書室**』。

デビュー十周年を迎える5人の作家が書いた、学校図書室を舞台にした物語です。目次をご覧くださいと分かりますが、錚々たるメンバーが名を連ねています。

好きな男子にプレゼントを渡しそびれた昨日を何度もやり直す女子の話や、嫌いな食べ物のことで母とけんかして家に帰りたくない男子が不思議な妖怪食堂に紛れ込むなど、「主人公は5年生」「茜色の張り紙」「長い髪の細身の学校司書」といったキーワードは共通した、全く違う5つの物語で構成されています。それでいて登場人物たちは微妙に絡み合っていて、一つの世界観が出来上がっています。

刊末の作家たちの座談会は、大人には興味深かったのですが、この作品を楽しめる子どもたちには少し難しいと感じました。もっと子どもたちに向けたメッセージがほしかったと思います。個人的には、どんな打ち合わせをして物語を書き始めたのか、どんな順番に書いていったのかを知りたいと思いました。

『**三島由宇、当選確実!**』。

積極的な性格で、生徒会の副会長をしている5年生の由宇は、手作りで鞆を作っている父と二人暮らしです。国会議員である父方の祖父の選挙を手伝う様子を描きながら、選挙制度の事を伝えている作品です。

父と祖父の確執や、秘書同士の嫉妬や裏切りなど、テレビドラマのような筋書きですが、そこは作者の腕で、物語にうまく選挙制度が織り込まれています。例えば、選挙事務所内で出されたお菓子はその場で食べてもいいけれど、持ち帰ってはいけない。自分の祖父ではあるけれど、「私のおじいちゃんを宜しくお願いします」と言うてはいけない等、物語を読み進めるうちに具体的に選挙の事が解ってきます。選挙については、生徒会選挙の話は今までいくつもありましたが、国政選挙を取り上げたのは初めてではという気がします。今年の発表でもフィクションとノンフ

イクシオンの融合について触れていましたが、今後もこういった作品が増えていくのではと感じました。

刊末にはイラスト付きで、選挙制度の解説もあります。選挙権が18歳に引き下げられたことや、中学校で選挙が取り上げられるようになったことによるものと思いますが、子どもたちには純粋に物語を楽しんでもらうために、「これを読めば選挙が分かる」という手渡し方はしてほしくないと思いました。中学生や高校生に選挙のブックトークをする際、ノンフィクションの資料と併せて紹介し、YA世代が「こんな作家もいるんだ」と知って、そこから新たな読書に繋がっていけば良いなと思います。

最後に一言。初めに2016年の出版傾向の話をさせていただきましたが、海外の作品が少なかったことや、日本の作品にはとても新人の作品が多かったこと、面白いという作品はあるものの、もう少し書き込んでも良かったのでは、もしくは終わり方がもう少し違っても良かったのではといった作品も多く、選書委員会でもそのような意見が度々聞かれました。

図書館員、学校司書、先生やボランティアの方々など、直接子どもに本を手渡す私たちと、物語を描く作家たちの間にいる出版社の編集者の皆さんに、海外の良い作品の発掘や新人作家の持つ可能性を引き出し、育てるために頑張っていたきたいという思いがあるので、「編集者ががんばれ!!」という言葉を添えたいと思います。

他ジャンルの発表でも、必ずしも登場人物の学年がその本の対象年齢ではないというお話がありました。ここ数年、益々その傾向が強くなっているように思います。

例えば、小学生が主人公の作品がありますが、その小学生が大人と関わっていく、また、中学生が主人公でも小学生にも読んでほしいという作品もあるので、読者対象が高学年とYAの境目にある作品はしっかり読んで、どちらのコーナーに入れるべきかを判断いただきたいと思います。

一方で、幼年の棚に並んでいて「楽しそうなお話」だと子どもが手に取っても、その話の本当の意図が伝わらないということもあるかと思っておりますので、手渡す私達がきちんと読んで、介在した方が良い場合は介在し、編集者の方々には「どの年齢の子どもたちを対象にその本を作ったのか」を挿し絵や装丁なども含め、今一度考えていただければと思っています。

(於：株式会社図書館流通センター 2017年3月6日・7日)

※本図書リストおよび講演録の無断転用・複製は固くお断りいたします。